

〈修士論文要旨〉

ひとつとはなぜ燈籠を建てたのか

長谷川 義 明*

日本の古代寺院の伽藍配置に関する分類や研究は比較的早くから行われている。にもかかわらず、それらの研究は講堂・金堂・塔といった中心的な建物のみを扱ってきた。また、平面的プランが重視され、本来礼拝する場所からみた伽藍配置の研究というのは軽視されてきた。

礼拝する場所とはどこか。韓国の古代寺院では、堂塔の前に礼拝石が据えられているのをよく見かける。日本では礼拝石の遺存例・検出例ともに少なく、あまり浸透しなかったのだろうか。韓国では礼拝石とともに燈籠が設置されている。献灯行為と礼拝行為がセットであるから、礼拝石の目の前に燈籠が置かれているのであろう。礼拝石の事例の少ない日本でも、燈籠の前で献灯し礼拝していたと考えられる。

そこで本論では、日本での燈籠の事例をもとに、伽藍配置の変遷とともに燈籠の位置—すなわち礼拝する場所がどのように変化していったのかを明らかにすることを目的とした。

発掘調査によって、現在燈籠が確認されている古代寺院は、15例にのぼる。そのうち、遺構の検出によって伽藍内での元位置がはっきりとしているのは、11例を数える。

以下、伽藍配置が時代ごとに変化していく順にみていきたい。

一塔三金堂の飛鳥寺式伽藍配置である奈良・飛鳥寺(図1)や、一塔一金堂が南北に並ぶ四天王寺式伽藍配置の奈良・山田寺(図2)、奈良・奥山廃寺(図3)では、燈籠は塔と金堂の間に位置する。

飛鳥寺式の伽藍配置は、伽藍の中軸から外れている東西金堂が優位になることはありえず、三金堂の中で中金堂が優位

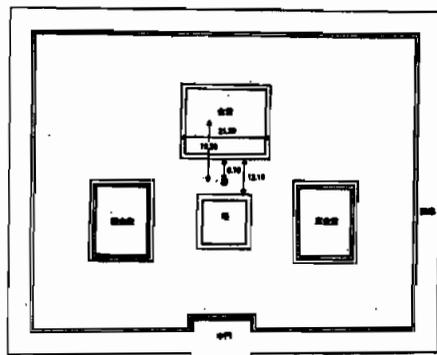


図1 飛鳥寺

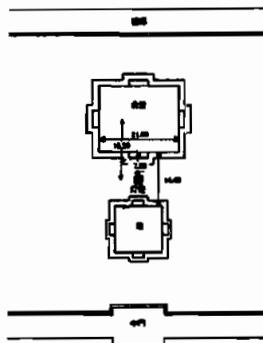


図2 山田寺

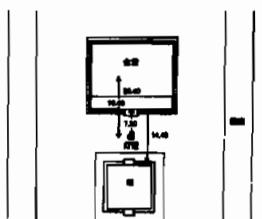


図3 奥山廃寺

0 50m
S=1:2000

となることは疑いない。こう考えてよければ、飛鳥寺式の伽藍配置は広義の四天王寺式伽藍配置として捉えることもできる。いずれにしても、飛鳥寺式・四天王寺式といった金堂・塔が中軸線上に並ぶ伽藍配置では、金堂と塔の間に燈籠は設置されている。

続いて、金堂と塔が左右に並ぶ法隆寺（法起寺）式伽藍配置をみていく。

奈良・法隆寺は、東に金堂、西に塔を配置する。法隆寺では、燈籠に関する遺構は未発見であるものの、『法隆寺伽藍縁起并流記資材帳』によれば西院伽藍には「燈二樓」があったという。どの堂塔に付随して建てられたのかについては記載がないが、重要な堂塔の順に配置されたと考えられる。金堂・五重塔・講堂が候補として挙げられるが、当時講堂は僧侶の説教・講義の場所であったから、仏の住まう空間であった金堂と、舍利信仰の対象である五重塔の前と考えるのが妥当であろう。法隆寺では、金堂と塔の前にそれぞれ燈籠を設置していたと考えられる。

法隆寺式伽藍配置と金堂・塔が左右反転する法起寺式伽藍配置の和歌山・佐野廃寺（図5）の例では、燈籠は金堂の前方に配置されている。法隆寺（法起寺）式の伽藍配置では、金堂と塔が並列しているため、ひとつの燈籠では両方の堂塔を礼拝できない。そのため、金堂の前に金堂専用の燈籠が設置され、礼拝したと考えられる。

薬師寺式伽藍配置は、金堂と東西二つの塔が「品」字状に配置される。和歌山・上野廃寺（図6）や奈良・薬師寺（図7）の例では、金堂中軸線上、東西塔を結ぶ線との交点に燈籠が配置される。他の伽藍配置が特別巨大な東大寺を除けば、金堂基壇から燈籠までの距離が5.0m～8.4mに収まるのと比較すると、薬師寺式の伽藍配置では金堂基壇から燈籠までの距離が12m～19.5m

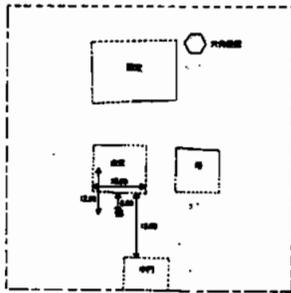


図4 佐野廃寺

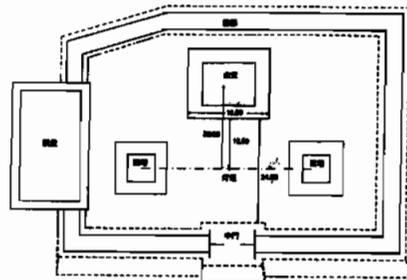


図6 上野廃寺



図5 米賀廃寺

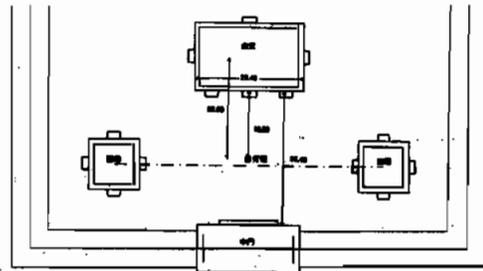
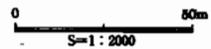
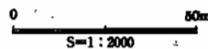


図7 薬師寺



と極端に遠く、東西両塔の位置が燈籠の位置を決定する要因となっていると考えざるをえない。燈籠が東西両塔を結ぶ線上に配置されなければならない理由は、東西両塔もこのひとつの燈籠で供養し、この場所を中心に北に向かって金堂を、東に向かって東塔を、西に向かって西塔を礼拝するためにほかならない。

奈良・興福寺(図8)や奈良・東大寺(図9)、兵庫・播磨国分寺(図10)、奈良・西隆寺(図11)などの寺院の伽藍配置では、回廊内に金堂以外の堂塔はない。金堂の前に設置された燈籠は、金堂・本尊を礼拝する専用のものへとかわる。

興福寺では中金堂前だけでなく、五重塔前にも奈良時代と考えられる燈籠の基礎がある。このことから、これら金堂や塔が独立した伽藍配置では、金堂・塔それぞれに燈籠が設置され、別に礼拝されていたと考えられる。

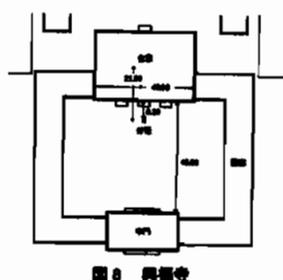


図8 興福寺

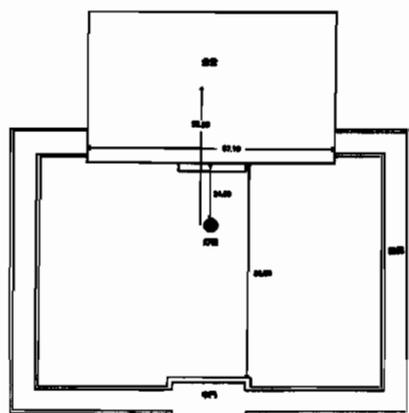
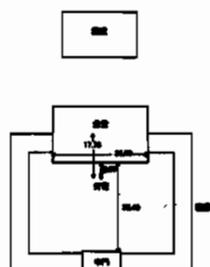


図9 東大寺



図10 播磨国分寺

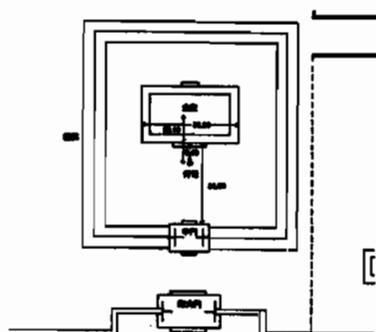


図11 西隆寺

以上のように、日本の古代寺院は飛鳥寺(四天王寺)式伽藍配置から法隆寺(法起寺)式伽藍配置、薬師寺式伽藍配置、大安寺(国分寺)式伽藍配置へと変遷していく中で、燈籠は常に塔の位置と密接に関係しながら位置を移動していく。

飛鳥寺(四天王寺)式伽藍配置では、燈籠は金堂と塔の間にあり、北を向いて金堂を礼拝した。塔については、その燈籠を用いて南に向かって塔を礼拝した可能性もある。しかし、善徳女王3年(634)の建立である韓国慶州の芬皇寺は、「品」字型に金堂を配置する一塔三金堂の伽藍配置であるが、塔の前方でも燈籠遺構が検出されている。また、芬皇寺と同じ韓国慶州の伝天官寺跡

は四天王寺式の伽藍配置であるが、ここでもやはり塔の前方にも燈籠が建てられている。これらの事例から、7世紀前半の日本の飛鳥寺式や四天王寺式の伽藍配置でも、塔の前方に燈籠が配置されていた可能性は高い。

法隆寺（法起寺）式伽藍配置では、東西に並ぶ金堂と塔の、少なくとも金堂の前方には金堂専用の燈籠があったと考えられる。場合によっては塔の前にも整備されたと考えられる。

薬師寺式の伽藍配置では、金堂の前方、東西両塔を結ぶ線上の交点に燈籠が設置された。これはひとつの燈籠を用いて献灯し、この場所を中心に金堂と東西両塔をすべて礼拝した。

また、大安寺（国分寺）式の伽藍配置では、金堂が独立し再び金堂専用の燈籠があらわれる。この伽藍配置では塔もまた独立し、場合によっては塔前にも専用の燈籠が設置された。

燈籠は、伽藍配置の変遷の中でその位置を大きく変えていくが、その背景には金堂だけでなく塔もまた燈籠を用いて礼拝しなければならない施設であった、という意識があったといえる。